

[普及事項]

新技術名：水稲新品種「つぶぞろい」の目標生育量の策定（平成22～25年）

研究機関名 農業試験場 作物部 作物栽培担当  
担当者 佐野広伸・三浦恒子 他3名

[要約] 目標収量を60kg/aとした場合の「つぶぞろい」の収量構成要素は、穂数は420～430本/m<sup>2</sup>、総粒数は26.9千粒/m<sup>2</sup>、1穂粒数は62～64粒、登熟歩合は90%、千粒重は24.9gである。また、時期別目標茎数は、6月25日は510～620本/m<sup>2</sup>、最高分けつ期は600～690本/m<sup>2</sup>、幼穂形成期は590～670本/m<sup>2</sup>であり、幼穂形成期の葉緑素計値は38.4、最終葉齢は12.3葉である。

[普及対象範囲]

「つぶぞろい」作付け地帯

[ねらい]

平成24年度に秋田県の奨励品種に採用された「つぶぞろい」は、平成27年度から本格的な作付けが開始される。そこで、「つぶぞろい」の目標収量に対する時期別の目標生育量を策定し、高品質・安定生産のための資料とする。

[技術の内容・特徴]

1. 総粒数が増加すると精玄米重が増加する傾向にあるが（図1）、1穂粒数が増加すると登熟歩合が低下するため（図2）、収量60kg/aを確保する目標値は、総粒数は26.9千粒、1穂粒数は62～64粒、穂数は420～430本/m<sup>2</sup>、登熟歩合は90%、玄米千粒重は24.9gとする（表1）。
2. 収量60kg/a、登熟歩合90%以上を確保する穂数は420～430本/m<sup>2</sup>であり（図3）、このときの幼穂形成期の茎数の目標値は590～670本/m<sup>2</sup>である（図4）。さらに同様の解析により6月25日の茎数は510～620本/m<sup>2</sup>、最高分けつ期の茎数は600～690本/m<sup>2</sup>である。
3. 収量60kg/aを確保し、穂数および茎数が目標値となる生育からの解析により（図省略）、葉緑素計値の目標値は、6月25日は42.4（39～45）、最高分けつ期は40.0（38～42）、幼穂形成期は38.4（37～40）とする（表2）。葉数の目標値は、最高分けつ期は10.0（9.5～10.4）葉、幼穂形成期は11.1（10～11）葉、最終葉齢は12.3（12～13）葉とする（表2）。

[成果の活用上の留意点]

1. 農業試験場内水田ほ場（細粒グライ土）で、栽植密度を21.2株/m<sup>2</sup>とした中苗移植栽培により調査した。
2. 基肥は窒素成分で0～0.7kg/aを全層施肥とし、追肥は0～0.4kg/aを幼穂形成期、減数分裂期のいずれか、または両時期に行った。

[具体的なデータ等]

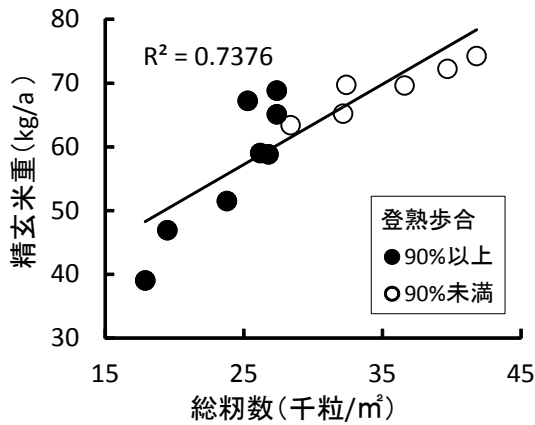


図1 総粒数が精玄米重に及ぼす影響

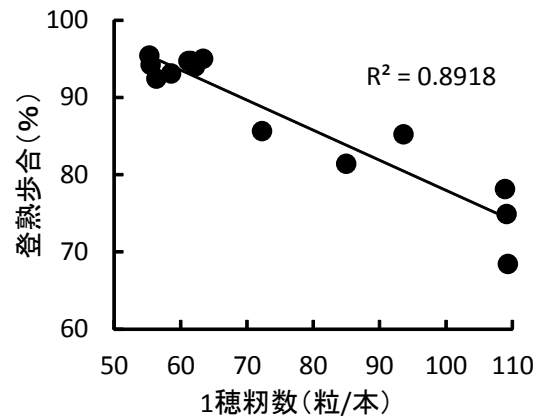


図2 1穂粒数が登熟歩合に及ぼす影響

表1 収量構成要素

収量	穂数	総粒数	1穂粒数	登熟歩合	千粒重
kg/a	本/m <sup>2</sup>	千粒/m <sup>2</sup>	粒/本	%	g
60	420~430	26.9	62~64	90	24.9

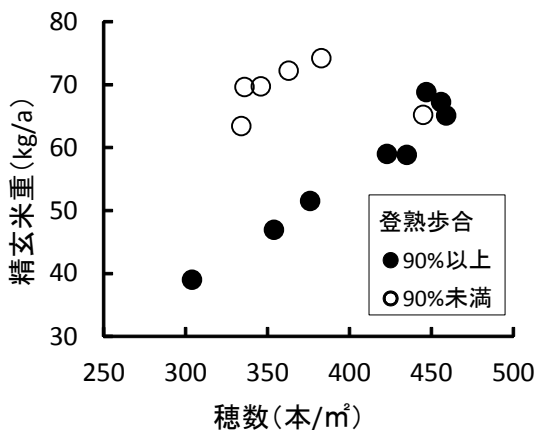


図3 穂数が精玄米重に及ぼす影響

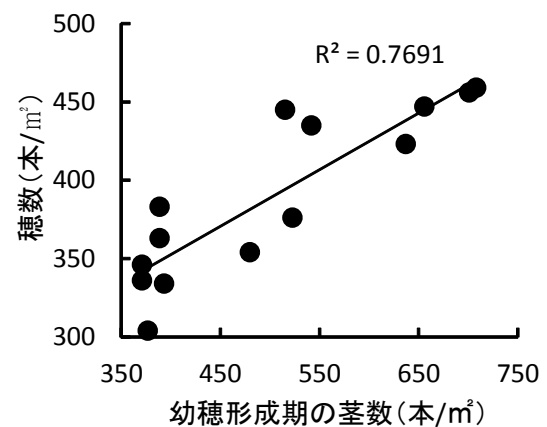


図4 幼穂形成期の茎数が穂数に及ぼす影響

表2 収量60kg/aでの時期別目標生育量

	6月25日	最高 分けつ期 7月5日	幼穂 形成期 7月16日	出穂期 8月8日
茎数(本/m <sup>2</sup> )	510~620	600~690	590~670	420~430
葉緑素計値 (下限~上限)	42.4 (39~45)	40.0 (38~42)	38.4 (37~40)	-
葉数 (下限~上限)	-	10.0 (9.5~10.4)	11.1 (10~11)	12.3 (12~13)

[発表論文等]

- 1) 三浦恒子・松本眞一・松波寿典・佐野広伸・佐藤雄幸. 2014. 水稻新品種「つぶぞろい」の収量および生育量の目標値の策定. 東北農業研究 67: 7-8